



医療法人明日佳
札幌宮の沢脳神経外科病院
院長

松村 茂樹 先生

1983年札幌医科大学卒業、
2012年から札幌宮の沢脳神
経外科病院院長。日本脳神経
外科学会脳神経外科専門医

今回のドクターは

「血管性認知症」について ～脳血管障害が原因の認知症です～

あなたの街の
ドクターが
アドバイス



急性のものや徐々に発症するタイプも。高血圧などの危険因子の治療を

血管性認知症は、脳血管障害が原因となる認知症です。通常、脳MRIなどで所見があることが多く、診断には画像検査が必要です。血管性認知症には、比較的症状が急に生じる脳卒中が原因であるものや、徐々に認知機能低下が進行することが多い小血管病性のものがあります。

くも膜下出血と脳出血が原因となるのは「出血性血管性認知症」です。くも膜下出血は脳動脈瘤の破裂により生じ、脳出血は高血圧が原因となることが最も多いのですが、最近では高血圧が無くても脳にアミロイドという異常タンパク質が蓄積する脳アミロイド血管症による脳出血が高齢者の方に増えてきています。MRIは、CTでわからないような微小な脳出血も明瞭に描出することができ、この診断にも有用です。

脳梗塞が原因の血管性認知症にはさまざまなタイプがあります。この場合、認知機能低下と脳梗塞発作の間に時間的な関連があることが多く、繰り返される脳梗塞により段階的に認知機能が低下する「多発性梗塞性認知症」、機能的に重要な部位に生じた脳梗塞により認知症が比較的急に発症する「戦略的部位の脳梗塞による血管性認知症」、その他、慢性的な脳の血流低下による「低灌流性血管性認知症」があります。

血管性認知症で最も多いのは、「小血管病性認知症」という、脳血管障害と認知症の発症に時間的な関連が明らかでなく、いつの間にか徐々に発症するものです。このタイプの原因としては、高血圧により脳の深部に多発する小さな脳梗塞、大脳白質病変と脳アミロイド血管症などがあります。

最近では脳血管障害の原因となる危険因子が同時にアルツハイマー型認知症にも関連するという報告も多く、特に高齢者の方には両方の合併例も多くみられます。

血管性認知症を防ぐには、まず危険因子の治療による脳血管障害の予防が重要です。日頃から高血圧、運動不足、糖尿病、脂質異常症、肥満、心臓細動、喫煙などの危険因子を積極的に治療することをお勧めします。